

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00368

研究課題名（和文）晩年のメルヴィル、その美学と政治 環大西洋的視点から

研究課題名（英文）Melville in His Later Years: His Aesthetics and Politics from Transatlantic Perspectives

研究代表者

齋木 郁乃（SAIKI, Ikuno）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：90294355

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、『白鯨』以降から晩年にかけてのメルヴィル作品を、トランスナショナルな視点から、その美学と政治学に着目しながら、再評価することを試みた。コロナ禍による研究期間の延長もあったが、その間、オンライン参加も含め国際学会にて3回、国内のシンポジウムにて2回の研究発表の機会に恵まれた。また、2018年12月にメルヴィルのトランスナショナリズムをテーマとした博士論文を仕上げてカリフォルニア大学リヴァーサイド校に提出した。論文「『キルケーの盃』--『エンカンターダス』におけるサバルタンの声」日本メルヴィル学会の学会誌_Sky-Hawk_に掲載された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、これまでの批評であまり高い評価を得られていないメルヴィルの後期の作品群を、アメリカに限定しない、国境を超えた歴史、社会、人的交流のコンテキストの中に置くことで再評価し、新たな魅力を発見したことである。また、『エンカンターダス』論においては、人種・ジェンダーの二重の差別を受け沈黙を強いられていたインディオとスペイン人の混血の女性の登場人物に、メルヴィルが声を持たせることに成功したことを論証し、作品の新たな解釈の可能性を見出した。

研究成果の概要（英文）：This study attempts to reassess Melville's works from after *Moby-Dick* to his later years, focusing on his aesthetics and politics from a transnational perspective. Although the research period was extended due to the pandemic, during that time, I had the opportunity to present my research three times at international conferences, including online participation, and once at a national symposium. I also completed a dissertation on Melville's transnationalism in December 2018 and submitted it to the University of California, Riverside. My paper titled " 'Circe's Cup': A Subaltern Voice in 'The Encantadas, or Enchanted Isles'" was published in *Sky-Hawk*, a journal of the Melville Society of Japan.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：ハーマン・メルヴィル トランスナショナリズム

1. 研究開始当初の背景

近年のアメリカ文学をアメリカという国家の枠組みを超越したダイナミックな知的、物質的、文化的、政治的交流から生まれたものとみなす文学批評の流れは、マルチカルチュラルイズム、グローバリズム、トランスナショナリズム、ポストコロニアリズムなど、様々な用語・概念によって表される。その中で特にメルヴィル研究に深い関わりを持つ批評的潮流として、トランスアトランティックな視点によるアメリカン・ルネッサンスの再評価がある。

南北戦争前のアメリカは、メルヴィルも参画したヤング・アメリカ運動に典型的に表されるように、ヨーロッパの文化と伝統からの断絶をことさらに強調することにより、アメリカ文化の独自性を主張し、民主主義の理想を体現するアメリカという国家のアイデンティティを確立しようとした。ローレンス・ビュエル (Lawrence Buell) が論じているように、マシーセン (F. O. Matthiessen) からジェイムソン (Fredrick Jameson) の流れをくむアメリカニストによる新歴史主義的なアメリカン・ルネッサンス研究もまた、アメリカの奴隷制度と 1850 年の妥協のようなアメリカ的文脈を特権化し、国際的な市場経済やヨーロッパの社会主義の影響力やヨーロッパ諸国の 1848 年革命を軽視する傾向にあった。その反動として、ヨーロッパ文化との断絶のレトリックの裏側にはヨーロッパ文化との連続性への自意識があること、また 19 世紀のアメリカの作家たちにとって、イギリスもアメリカと同じくらい重要な文学市場だったことに着目した、アメリカ文学の環大西洋的読み直しの作業が進んでいる。

1920 年代のメルヴィル・リヴァイヴァル以降、ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) の後期の創作活動は「長い静止」や「失敗した詩人」のような否定的な評価がなされてきたが、近年盛んに行われるようになった詩人としてのメルヴィルの再評価や、トランスアトランティックな視点からのアメリカン・ルネッサンス再検討の潮流に乗り、晩年のメルヴィル作品の美学的、政治的保守性についても新たな解釈がなされるようになった。

2. 研究の目的

本研究は、従来 *Moby-Dick; or, The Whale* (1851) の完成を頂点に、家庭の不幸や文壇の低評価の中で筆力も衰え、不遇な晩年を送ったと考えられがちなメルヴィルの後半生に書かれた作品を、その美学と政治学に着目しつつ、南北戦争後のトランスナショナルな歴史観に基づいてアメリカ (の知的) 独立革命を再考する作品群として再評価することを目的とした。

アメリカの知的独立を謳うヤング・アメリカ運動の勢いそのままに (ただしそれを批判する視点も含みつつ) 意気軒昂に欧米の植民地政策や人種主義を批判する作品を書いた 1840 から 50 年代のメルヴィルに比して、保守化し、社会から隔絶されて、船乗り時代をノスタルジックに回顧する作品を細々と書いていた、とされる晩年のメルヴィルが、実は前期に劣らず政治的であったことを明らかにする試みである。

以上の結果、アメリカン・ルネッサンスの作家で終わらない、南北戦争後のトランスナショナルなアメリカ文学史の文脈にメルヴィルを位置付けた。

3. 研究の方法

トランスナショナリズムの視点からアメリカン・ルネッサンスの作品を論じた最近の批評をまとめて概観し、その枠組みの中でメルヴィル後期の作品群を読み直した。

2018 年から 2019 年にかけて、サバティカルを利用して渡米し、カリフォルニア大学リヴァーサイド校英文科にてジェニファー・ドイル先生他の指導のもと、博士論文を執筆し提出した。2023 年夏にも同校附属図書館にてリサーチを行った。国際メルヴィル学会および日本メルヴィル学会を中心とする国内外の学会で研究発表をし、国内外の研究者たちの助言を仰ぎながら改稿し、学術誌に投稿した。2023 年春より、メルヴィルが南北戦争について書いた詩集 *Battle Pieces and Aspects of the War* の翻訳プロジェクトに参加し、共訳者と協力し翻訳および詳細な注の作成に取り組んだ。また、2025 年刊行予定のメルヴィルの問題作 *Pierre; or The Ambiguities* についての論集に投稿するために国内外でリサーチを継続中である。

4. 研究成果

アメリカの奴隷制度と 1850 年の妥協のようなアメリカ的文脈を特権化する歴史観にとらわれることなく、国際的な市場経済やヨーロッパの社会主義の影響力、特にヨーロッパ諸国の 1848 年革命の失敗に対するメルヴィルの失望とそれによる民主主義の本質についての深い考察について、トランスナショナルな枠組みの中で再考することができた。

メルヴィル作品に見るトランスナショナルなアメリカ像を論じた博士論文 *Melville on the Beach: Transnational Visions of America* を執筆、カリフォルニア大学リヴァーサイド校に提出した。本論文では、ハーマン・メルヴィルが異質な文化、特にポリネシアとの出会いの中で培った、国境を越えたアメリカ像を考察した。メルヴィルの流動的で漂流するような心のあり方を “On the Beach” (beachcomber として浜辺を放浪している状態) と名付け、そこで彼は人種、階級、ジェンダーといったヴィクトリア朝的な文化規範に脅かされつつもそこから解放される

とした。メルヴィルの文章で印象的なのは、様々な異文化の中で植地的な不安や恐怖を感じながらも、文明と野蛮の狭間にいることの歓喜に満ちた喜びを描いていることである。メルヴィルが自国への希望を失うにつれて、その「浜辺で戯れる喜び」は薄れていくが、それでもなお彼はこのリミナルでトランスナショナルな空間に自らを置くことをためらわず、文学者としてのキャリアの残りの期間、この「間（あわい）にいる」状態に共感し続けたのである。博士論文の中で本研究のテーマを深めるのに最も影響したのは、メルヴィルのビーチコーマー精神のあり方とアメリカ研究という分野そのものの越境を論じたイントロダクションである。

論文「「キルケーの盃--「エンカンターダス」におけるサバルタンの声」は、「エンカンターダス」の中でもよく論じられる八番目のスケッチ「ノーフォーク島とチョーラの未亡人」を取り上げ、過去の批評ではほとんど疑問を呈されることのなかった語りの信ぴょう性への懐疑を提示することで、サバルタンの立場ゆえに沈黙を強いられる混血の女性ウニーヤの声を回復させる、メルヴィルの腹話術的な語りの手法について論じ、このスケッチの解釈に新たな視点を持ち込むことに成功した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 斎木郁乃	4. 巻 11
2. 論文標題 「キルケーの盃」--「エンカンターダス」におけるサバルタンの声	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Sky-Hawk (The Melville Society of Japan)	6. 最初と最後の頁 5-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Ikuno Saiki
2. 発表標題 A Woman on a Deserted Island: Sexuality and Environmental Energies in 'The Encantadas' and Tokyo Island
3. 学会等名 Melville's Energies: Aesthetics, Politics, Ecologies (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 斎木郁乃
2. 発表標題 「エンカンターダス」の騙り
3. 学会等名 名古屋大学英文学会第59回大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ikuno Saiki
2. 発表標題 Imagining the Pacific: Moby-Dick and "Impenetrable Japans"
3. 学会等名 国際メルヴィル学会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1．発表者名 Ikuno Saiki
2．発表標題 "Something Healing": Domesticity and Fatherhood in "Billy Budd"
3．学会等名 国際比較文学会（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 斎木郁乃
2．発表標題 「太平洋を想像する 『白鯨』における島と漂流」
3．学会等名 日本メルヴィル学会
4．発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1．著者名 Ikuno Saiki	4．発行年 2018年
2．出版社 eScholarship, University of California	5．総ページ数 202
3．書名 Melville on the Beach: Transnational Visions of America	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------